

昨年度からスタートした研修医2年目を対象とした海外研修で、2009年1月の1ヵ月間、ドイツのフライブルグという街にあるUniversity of Friburgの小児科で研修を受けてきました。私は以前から、機会があれば海外に行って、医療を見てみたいと思っていましたが、なかなかその機会に恵まれずにいました。昨年の海外臨床研修は皮膚科と麻酔科で受け入れがあり、小児科の枠はなかったため、小児科志望の私は研修に参加できないだろうと諦めていました。しかし、先方の都合で今年から小児科も受け入れ可能となったため、小児科志望の私にプログラムディレクターの長谷川徹先生からお話がありました。このようなチャンスは滅多にないと思い、参加させていただくことにしました。H21年1月2日、同じくUniversity of Friburgの皮膚科で研修に参加する研修医2年目の海部先生と共にドイツへと飛び立ちました。ドイツに着くまでは向こうでの生活を想像して、楽しみだなという少しの期待とやっつけられるのかなという大きな不安がありました。フランクフルト空港に到着し、フライブルグ行きのICE(日本の新幹線みたいなもの)に乗らなければいけなくて、空港長距離列車駅を探しましたが、なかなか見つかりません。警察官や、インフォメーションセンターの受付、警備員などいろいろな人に尋ねましたが、みんな返ってくる答えがバラバラ……。いったいどこに行けばいいのだろう、こんな所で暮らしていけるのかと不安でいっぱいになり、泣きそうな顔をしていると、駅員さんが『May I help you?』と声をかけてくれました。駅員さんは英語をゆっくりとジェスチャー付きで話してくれて、駅につながるエスカレーターまで連れて行ってくれました。ドイツ人の優しさに感動し、少し不安が減った瞬間でした。University of Friburgは大学の敷地が街の広い範囲に広がっていて、科によって建物が独立してあるといった形態で、日本の大学病院のように一つの建物の中に様々な科があるといった形態とは違います。小児科もKinderKlinikといって小児病院として大きな建物が独立してあり、海部先生がいる皮膚科の病院までは徒歩40分ほど離れていました。建物の中はカラフルで、絵や人形、おもちゃもたくさんあり、病院という雰囲気ではなく子供部屋という雰囲気でした。研修初日は、先方の小児科のSuperti-Furga 教授に挨拶をする予定になっていました。拙い英語で自分のこれまでの経歴とこの1ヵ月の研修でしたいことを話しました。その結果最初の2週間は病棟を、後の2週間はICUで研修をすることになりました。病棟は9つほどあり、病棟の名前はStation Moro(Moro反射を発見した小児科医Ernst Moro)などすべて功績を残した医師の名前がついています。循環器、血液/腫瘍、神経、新生児/乳児、感染症病棟、ICUなどたくさんありましたが、私はStation Rietschelという腎臓病や手術後の子どもたちがいる病棟で研修することになりました。医者2年目の女医と1年目の医者がおおり、その上にいわゆる『オーベン』の上司の先生がおおり3人で働いています。しか

し実際は上の先生は朝・夕の看護師とのカンファレンスにのみで、私と同じ学年の2年目の女医と1年目の医者で病棟をみているというような感じです。自分たちで考え、看護師に指示し、患者さんを診察し、母親に対するインフォームドコンセントもする。そういった自立している姿に感心し、とてもいい影響を受けました。

後半のICUでの実習は、10年目クラスのベテランのDrばかりで、つきっきりで指導していただけて、とても勉強になりました。低出生体重児や術後に集中治療が必要な子や病棟で状態が悪くなってしまった子などいろいろな患者さんがいました。毎日患者さんの変動が激しくとても忙しかったですが、楽しくて充実しており、あっという間に2週間が過ぎてしまいました。あんなに不安だったドイツでの生活が、最後にはここから離れたくないと思うようになりました。

この研修で得たことは、小児を診療するときには、言葉が伝わらない分、母親からの情報が子供の状態を知るためにいかに大切かということです。母親が子供の状態をドイツ語で説明してくれるのですが、全く分かりません。その時に子供をよく観察し、子供の泣き方、呼吸の仕方、表情、顔色、肌の色、四肢の動かし方などの情報を感じ取ることも大切なことだと再認識しました。

この研修に参加し、ドイツの若い医師のモチベーション・能力の高さにいい刺激を受け、自分も頑張らねばという気持ちになりました。Superti-Furga 教授が『いつか君が立派な小児科医になり、学会などの場で再会できるのを楽しみにしているよ！See you!』とってくださいました。その言葉を胸に、この研修で得た経験を今後の医療に生かせたらなと思います。

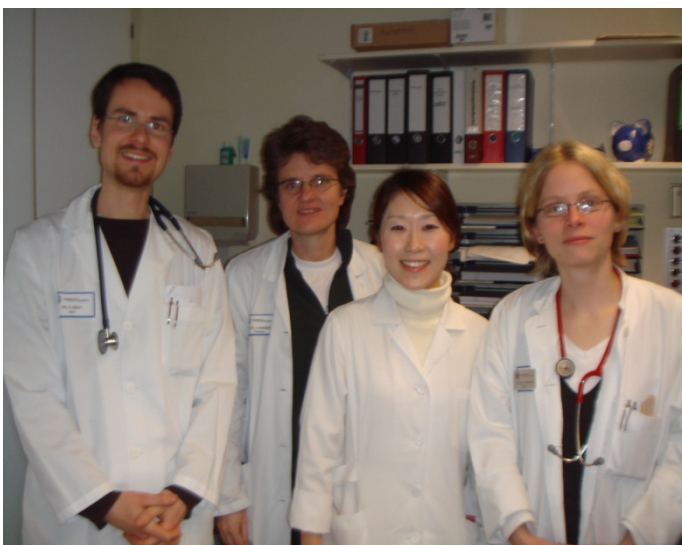
今回の海外研修を始めるにあたって、先方への連絡や手続きをしてくださったプログラムディレクターの長谷川徹先生、同行していただいた柏原直樹レジデント教育委員長には感謝しています。おかげでスムーズに研修に入ることができました。また、われわれを受け入れてくださったホストのSuperti-Furga 教授には大変お世話になり、誠に感謝しております。そして最後になりましたが研修期間中にも関わらず、このような機会を与えていただいた、角田司病院長、植木宏明学長、川崎明德理事長先生をはじめとする川崎医科大学附属病院関係者の皆様にとっても感謝しています。



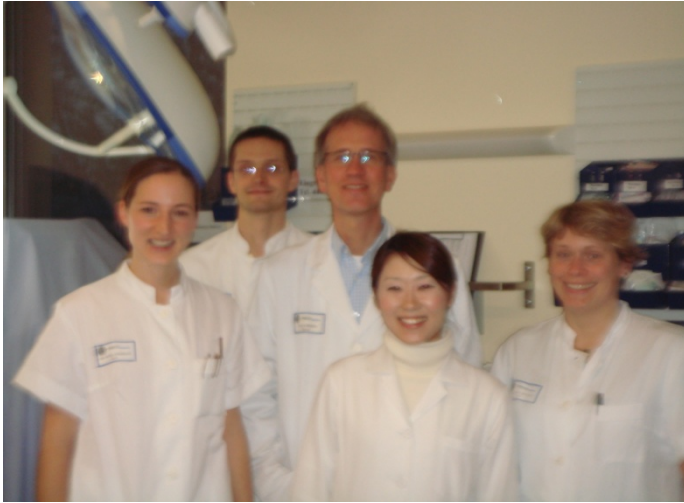
子供たちは注射など痛いことを我慢した時にコインが貰える。そのコインを入れたらこの大きな模型の仕掛けが動き出す。



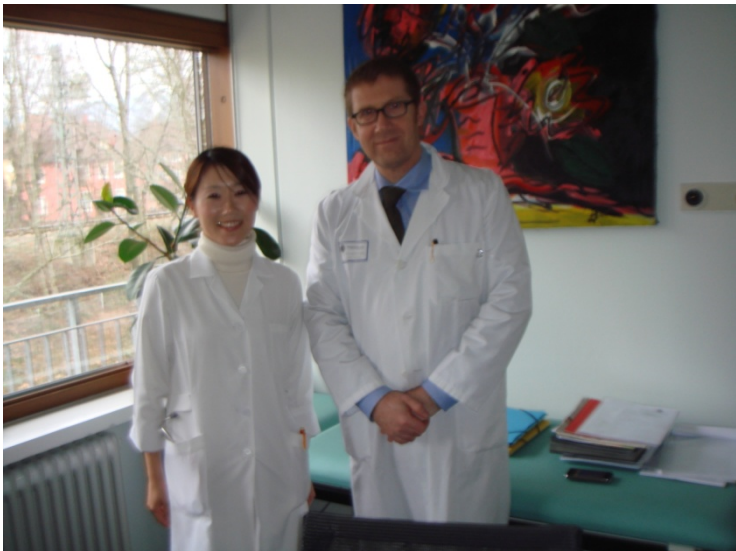
Station Rietschel での朝の看護師とのカンファレンス風景。
朝・夕と1日2回、クッキーをつまみ、コーヒーを飲みながら楽しい雰囲気で行われる。



Station Rietschel の Dr たち。
左から1年目の医師 Andrej、オーベン Dr. Heintzmann、2年目の女医 Ruth。



Station Keller(ICU)のDrたち。
みんな10年目ぐらいのベテランの
Dr。



小児科の教授のトップ
Superti-Furga 教授。